奥野田小学校

「確かな学力」を育む学習指導法の改善

～「わかる」「できる」を実感できる算数科の授業づくり～

Ⅰ　研究の内容

1　研究仮説

基礎的・基本的な知識・技能をより明確にしたり，教材や指導方法を工夫したりして「わかる」授業づくりをすることで，児童一人一人が「わかる」楽しさ，「できる」喜びを実感したとき，学習への意欲が高まり「確かな学力」が育まれていくだろう。

2　研究の方法と内容

（1）授業研究　　研究授業（低学年，高学年ブロック各１本）　一人一実践授業

（2）テーマに関わる理論研究

（3）特別支援教育の研究

（4）Ｑ－Ｕの実施と分析・活用の充実

3　研究実践

（1）学習会

ア　「Ｑ－Ｕの分析方法について」

講師　甲州市スクールカウンセラー　長尾　雅裕先生

イ　学級集団の力を高めるための取り組みについての学習会

（2）研究授業

ア　低学年ブロックの研究

２学年授業研究「新しい計算を考えよう　かけ算（１）」梶原　美奈子教諭

指導助言　峡東教育事務所主幹・指導主事　小林俊彦先生

イ　高学年ブロックの研究

５学年授業研究「小数のわり算を考えよう」　古屋　みゆき教諭

（3）授業実践

ア　１学年授業実践「２０よりおおきいかず　」　広瀬　美穂教諭

イ　３学年授業実践「三角形のなかまを調べよう」　山縣　重人教諭

ウ　４学年授業実践「分数をくわしく調べよう」　飯田　憲政教諭

エ　６学年授業実践「速さの復習」　前島　国学教諭

オ　すみれ学級授業実践「２学期にがんばったことを発表しよう」

植原　恵子教諭

カ　あおば学級授業実践「およその数の表し方を考えよう」　相川　和彦教諭

Ⅱ　成果と課題

1．成果

・「わかる」「できる」が実感できる授業に取り組むことが，本校の児童の学習意欲や学力の向上につながっていた。また，日々の授業においても，「わかった」「できた」を実感させるために，どのように工夫して授業を行い，子どもたちに取り組ませていくかを考えたり，話し合ったりすることが多くなった。

・算数に焦点化したことで，各学年のつながりを考えた研究になっていた。主題，仮説とも児童ばかりでなく，教える側にとっても適切であった。

・子どもたちの学習意欲については，２回のＱＵ（５月，１１月実施）で比べてみると，２回目の方がほとんどの学年でその数値が向上している。また，やや下がっている学年が２つあるが，両学年とも２回のＱＵは全国平均よりも上であり，もともと学習意欲は高い。このことから，先生方の日頃の授業に対する取り組みの効果が現れてきていると考えられる。

・子どもたちの学力については，各学年で行っている市販テストの２学期の到達度とテストに明記されている目標点を比較した。どの学年も到達度が目標点を超えていることから，今年度の取り組みにより，「わかる」「できる」を実感している子どもが増えていると考える。

・実践例を本校の児童の実態に当てはめながら，工夫を考えたり話し合ったりする理論研究が良かった。今後も続けていきたい。

・今までもＱＵの分析をしてきたが，長尾先生に改めて分析の仕方を教えていただいたことが良かった。ＱＵの結果から，学級の実態や気にかかる児童についての分析が速く的確にできるようになり，どう対応してくかについて具体的な話し合いを行うことができた。対応策をしっかり実践していくことを大切にしたい。

２　課題

・一人一実践は，研究主題を変えて初年度ということもあり，全体的に時期が遅くなってしまった。一人一実践にどう取り組むかも大切だが，授業中の児童の様子から参観者が相互に学び合えるような機会になると良かった。そのためには実施時期や実施単元を前もって決めておいたり，校内研の日に行ったりするなどの実施日の工夫が必要である。今年度，実践後に都合のつく先生方で研究会を持ったが，そういう機会を大切にしたい。

・昨年度のＮＲＴの結果をもとにしての主題設定であるのだから「確かな学力育成プロジェクト」との関連は深い。できる限り校内研と関連づけていくようにしたい。

・校内研につながる諸々の準備の時間（提案資料作成，教材研究）の確保が必要である。時間をうまくやり繰りしていきたい。また，来年度のＮＲＴやＱＵの中の学習や学習意欲に関する結果を細かく分析し，今年度の授業の工夫は効果があったのか，そしてその反省をもとに授業をどう工夫していくかを考えることが，２年目に向けて必要である。

Ⅲ　成果物

１　研究授業，一人一実践の指導案８点と使用した教具，ワークシート

（研究主任　山縣重人）